
あの日の音

ぽん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの日の音

【Nコード】

N7210K

【作者名】

ぼん

【あらすじ】

ピアノの天才少女祐美は一つ上の野球部の先輩に突然告白される。その先輩の名前は星野康樹、通称康。彼もまた野球の天才児だった。そんな二人が愛し合い、助けあいながら必死に支えあう。そんな中、祐美はウィーンで開かれた演奏会に参加する。そして祐美はその演奏会で一人の人と出会う……。

どうして一人の人しか愛しちゃだめなの？二人愛するのはだめなの？どうしてかわからない……。そんな少女が愛するのは……？

* 一章 * 音の世界

音楽室に響く音。リズムが正確で音に狂いがない。しかし、軽快な曲なのに音たちが重く感じた。

音楽室の外では、野球部の打球音、サッカー部のパスの音、陸上部のピストルの音。どれもが輝いていた。皆どの部活も夏の大会に向けて一生懸命部活に励んでいた。

夕暮れに近い時、音楽室から違う音が聞こえた。ドアを開ける音だった。

「部活終わったよ。帰ろう」

少年の声だった。今まで響いていた音よりも軽かった。

「うん。分かった」

今度は少女の声だった。今まで響いていた音に似て、どこか重かった。

二人で音の発信源 - ピアノを閉まっていた。

「じゃあ、鍵返しにいこう。」

二人は職員室まで鍵を返しに行った。

* 2章* 初めて

少女の名前は中田祐美。中一で帰宅部。放課後は火、木のレッスン以外、放課後は音楽室でピアノを弾いている。本当は家に帰って弾きたいのだが、祐美の彼氏・星野康樹と一緒に帰りたいというので仕方なく学校で弾いている。

祐美がピアノの始めたのは5歳のとき。友達の美紗希と一緒に美紗希が通っているピアノ教室に行ったら先生に、触ってみる？と言われて、美紗希が弾いていた曲をいきなり弾き始めた。それから先生は

「あなたはもの凄い才能を持っているわ！一度お母さんを連れきていい先生を紹介してあげる」

と言われたことがきっかけで今の先生に教わっている。

祐美はそれからというもの、数々のコンクールで優勝している。小学生のとき、コンクールの審査員の先生に留学の誘いまで来たが、祐美はきっぱりと断った。私は日本がいいと。

そして少年の名前はさつき出てきた星野康樹、通称康。2年の野球部期待の星。噂では3年の先輩よりも強いとか。

二人が付き合い始めたのは 5月のこと。康からだった。康は廊下で祐美と初めてすれ違った時、他の女子には無い何かを感じた。それ以降康は祐美のことが気になり始めた。そして祐美がピアノの全国大会に出場するので、全校生徒の前でピアノを弾いたのを見てその気持ちは確かになった。そして発表が終ったあと康は祐美を呼び出して告白した。

「俺、中田さんの事が好きだ。付き合ってくれ」

祐美はびっくりした。先輩に告白されるなんて思ってもいなかったからだ。祐美は驚きのあまりとっさに、

「こんな私でよかったら」

といった。康はとても喜んでいた。実は祐美は康を見るのは3回目だった。一回目は廊下ですれ違った時。2回目美紗希が二年の先輩にかついい人がいるといわれて2年の廊下に行ったとき、康とぶつかった。そのとき康はすごい勢いであやまって来た。ちよつとうれしかったなと思った程度だった。康のほうはすごい喜んでいたが・・・・。

3回目は告白されたとき。

「な、日曜俺んちこない？親が祐美見たがってるんだ」

「いいけど……。てか親にいったの？康」

「言う前にばれた。何であんた最近帰りが遅いの？まさか彼女でもいるの？って」

「康はなんて返事したの？」

「うん。1年のすんごいピアノがうまくてかわいい子って。そして母親が康にはもったいないわ。かわいい子なんて。」

「もったいないってお前らの子供だろうが！！って言ってやったよ」

「康らしい答え方だね。康のそういうところ好きだよ」

「いまさら好きっていわれてもな」

「何それ！！！」

「はは、ジョーダンだよ、ジョーダン。まって、ちょっと目つぶって」

「うん？何？」

「いーからめーつぶって！」

祐美は目をつぶった。そしたら唇になにかが触れた。康の唇だった。

「康……。今何したの？」

「キスだよ。もしかしてファーストキスだった？」

「うん。ファーストキスが康でうれしい」

「じゃあっもう一回」

また祐美の唇と康の唇が重なった。さっきよりも長く。康はそのまま祐美を抱いた。優しく、丁寧に。そのとき祐美は泣いていた。

「どうしたの？泣いて」

「嬉しくて嬉しくて、涙が止まらないの。康、愛してる」

「俺もだよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7210k/>

あの日の音

2010年10月8日23時59分発行